

---

# 電腦世界『ネクスト・ワールド』

Rail

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

電腦世界『ネクスト・ワールド』

### 【著者名】

Rail

N9855T

### 【あらすじ】

五十年のコールドスリープから目覚めた伊佐君は、電腦世界『ネクスト・ワールド』にいたく興味を示したようだ。せつかくなので『ネクスト・ワールド』の中を案内したのだけど？

電腦世界『ネクスト・ワールド』。

この世界に入るためには、卵型の『「ネクタ』と呼ばれる機械に入つて寝そべり、『ネクスト・ワールド』と神経をつなげばOK。そうするとその人間は昔の映画のマトリックスよろしくリアルな仮想世界へと意識を転送することができるというわけだ。

この仕組みができるから三十年。バージョンアップにバージョンアップを重ねて、今やネクスト・ワールドには世界中から三億の人間がログインしているというわけ。

僕がそう説明すると、田の前の青年は顔を輝かせた。

「つまりはVRMMOなんですね！」

「VR……？ それが何かは知らないが、仮想現実といつやつだよ」「すっげえ！」

「……僕は未来の世界がみたいからと試験段階のワールドスリープに挑戦した君の方がすごいと思うがね」

22世紀は宇宙を目指した世紀だった。

21世紀の内に月や火星などの近い星へは降り立つことができたのだが、それ以上に遠い星へ行くには課題があった。燃料と、乗組員である。

こと燃料はロケットを改良することで年々燃費を上げることができたが、乗組員は違う。日々の生活に食料が必要だし、酸素も必要だ。遠くに行くにはトラブルも予想して多くの人員が必要だが、それに伴つて多くの物資も必要となる。

また、往復に数十年かかるだろうと言われている宇宙飛行では、乗組員が普通に生活していれば加齢によつて肉体が衰える。

その両方を解決する糸口となつたのが人工的な冬眠だ。

人工的に体温を下げ新陳代謝を低下させることによつて人間を仮死状態に保ち、エネルギーの消費を抑える。同時に加齢も鈍化させることができ、乗組員たちの鮮度を高く保つ。

といつても課題は多く、短期中期長期のコールドスリープは人体にどのような影響をもたらすのかというデータが足りなかつた。こと長期のコールドスリープでは、周囲の人間との時間差が出来てしまい、ちょっとした浦島太郎状態に陥つてしまつ。そのため被験者がなかなか集まりにくい状態だつた。

そんな中、我こそはと名乗りを上げたのが今僕の目の前に居る伊佐君である。

未来の世界が見たいと言つた彼は、まだ大学を出たばかりだといふのにこの五十年に渡るコールドスリープの被験者に名乗り出た。  
…………就職活動に失敗したから現実逃避の一環であるという噂もあるが。

見た目は二十代の伊佐君だが、生まれた年で考えると現在30代の僕よりも四十歳ほど年上ということになる。

色々伊佐君には検査を受けてもらつたが結果は上々。これならばコールドスリープが実用化される日も近いだろつ。

さて、五十年も眠つていた彼だ。たつた数年生まれが違うだけでもジョネレーションギャップがある時代だ。当然彼の知識と現代の

ものには大きなギャップがある。

それを埋めるための勉強会が今やっていることなのだが、

「俺、俺、ネクスト・ワールドにログインしたいっす！」

伊佐君は顔を紅潮させて言つた。

おかしなことを言つものだ。

「検査が全て終わつたらできるんじゃないかな。というか、そのうちしなきゃいけなくなるかもしねない」

「そうなんですか！？」

僕は彼が興奮する理由が分からず、首を傾げた。

伊佐君は『ネクスト・ワールド』の原型が出来上がつたころにはすでに『ワールドスリープ』に入つてているわけだから、予備知識はないはずだ。それに彼の反応を見るに、何か勘違いをしていそうだ。  
「どうがない、百聞は一見にしかずだ。

「なんなら、今から『ネクスト・ワールド』に入つてみるかい？  
この施設にも『コネクタ』はあるから」

「つはい！ 是非！」

嬉々としている彼を見て、やっぱり何か勘違いしてるんだろうな  
あと思つ。

五十年のジエネレーションギャップはなかなかに厳しい。

『「ネクタ』は』へシンプルな作りだ。外観は大きな卵。ドアを

開けると中には寝返りがうてて体を起こせる程度の空間。頭を載せる部分には神経と『ネクスト・ワールド』をつなぐ機械がある。

開発初期はヘルメットを装着していたそうだが、現在では特殊な電気信号を送ることで直接電気信号を送らなくともログインできるようになった。

「じゃあ中で寝転がって」

「はい！」

嬉々として伊佐君が『コネクタ』の中に入る。  
僕も隣りの『コネクタ』に入った。

「あー、目的地、『ワールドスリープ研究所、コード20A302W。

同行者、伊佐」

『認識しました』

電子音声が流れる。

途端に体を引っ張られる慣れた感覚がした。

次に意識が戻った時には、僕は見慣れた場所に立っていた。ワールドスリープ研究所の一階、接続したとき最初に送られるコネクトセンターだ。

「主任、おはようございます」

「うん、おはよう」

僕は受付のワズに挨拶をする。

「いじは？」

伊佐君は興味津々の様子であちこち見まわしていた。  
僕は笑った。

「ネクスト・ワールド内にある『ワールドスリープ研究所』だよ  
「へ？」

何故か伊佐君は鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をした。

「も、モンスターは？ ギルドは？」

慌てたように言ひ伊佐君に、僕は今度こそ首を傾げた。

「研究所にはそういうものは必要ないな。どうしてそんなものがいると思ったの？」

「は？」

五十年前には、研究所にモンスターがいたのだろうか。聞いたことはないが。

僕が分かつていないので察してか、伊佐君はじれったそうに言う。  
「だって、VRMMOなんでしょう？ ゲームなのにどうして敵モ  
ンスターがないんですか？」

「は？」

今度は僕から間抜けな声が出た。

「おいおい、伊佐君は何を言つてるんだ？」

「ネクスト・ワールドはゲームじゃないよ。仮想現実だ。世界中か

らたくさん的人がログインしている」

「それは聞きました。だからそれはゲームで遊ぶためじゃないんですか?」

「……伊佐君が大学生のころに何をやうゲームがあったのかい?」「パソコン上でなら

「うーん……」

それで伊佐君が勘違いしてしまっていたのか。

僕は思わず唸つた。

「伊佐君、案内しながら説明するよ

僕は伊佐君を促して歩き出した。

最初に通ったのは第一研究室。半透明のガラスの透明度を上げて、中が見えるようになります。

「ここは『ワールドスリープ』の精度を上げる研究をしている場所」

中にはエジプトのアミーン、フィンランドのヨハンナ、ロシアのマルクがいた。ウインドウに映し出されたデータを見ながら熱心に話し合っている。

その部屋を通り過ぎると、第二研究室。こちらも中を見るようにすると、たまたま休憩中だったのか中に居たメンバーと視線があつた。

「あつちで手を振つてるのが左から韓国のユナ、スウェーデンのダグ、イタリアのデボラ、イギリスのアドルフ」

「Hi! Good morning, Mr. Issa!」

アドルフが喋ると、中空に「やあ、おはよー、伊佐さん」という字幕が浮かんだ。

「イサ・シヌン、キョナクトゴ、ノジムニカ?」

ユナの顔の下に「伊佐さんは見学されているのですか?」といつ字幕が浮かんだ。

「やうだよ。ネクスト・ワールドに入ったのは初めてだそつだ」

僕からは見えないが、彼らにも僕の喋っていることは字幕付きで見えるはずである。

それだから一言メッセージを貢つて次に歩き出す。

第三研究室は会議中だったので飛ばして、空いている会議室に入つた。

何か、伊佐君が呆けている様子だったから座るよつに促した。メニューを呼び出して、コーヒーを注文する。五秒としないつむぎでブルの上に一人分のコーヒーが出現した。

「どうかな、伊佐君。初めてのネクスト・ワールドの感想は」

僕が問いかけると、伊佐君は我に返つたようだつた。

「すゞいっすね……まるでリアルと変わらない」

「だりづつ?」

ネクスト・ワールドを最初に利用した人はまずそこに驚く。仮想現実というからこそもっと出来の悪いものだと思つていたと。

「あの、ネクスト・ワールドっていうのは何をする場所なんですか？みんな仕事してるように見てたんですけど」

まるで腑に落ちないといった様子で伊佐君が言つ。ふむ、この様子じゃネクスト・ワールドの存在意義が分かっていないようだ。

「何をするって、もちろん仕事をするための場所だよ。オンラインでね」

僕はネクスト・ワールドの歴史をつづった本を呼びだした。成り立ちから説明しよう。

中空に浮かんだいくつかのウインドウに該当箇所をピックアップする。

「IJの仮想空間の素晴らしさ」といは、現実世界に酷似しながらもオンラインだからほぼタイムラグなしに世界中の人がログインできることことなのだ

該当記事を拡大する。

『世界の裏と表をオンラインでつなぐ』と書かれていた。

「今までやっていた学会なんかも、全てオンラインで出来るようになった。つまり『ネクタ』さえあれば、自分の研究室に居ながらにして世界中の学者たちと会って討論することができるようになつたというわけだ」

次の記事。『全世界の医師が集まる学会、定期開催決定』といふ見出しが躍っている。

「学者、医者、研究者、企業家、宗教家、政治家。そういった人々はネクスト・ワールドの登場によつて幅広い交流を持つことができた。そしてさらにそれに機能が加わり、さつき君も体験しただろう？　リアルの世界では不可能な、同時翻訳の字幕まで」

翻訳機能が付加されることにより、他国の人間とも交流が容易になつた。当初は翻訳の精度がいまいちだつたが、年々改良され、今や専門用語は完全に網羅、ニュアンスすら伝えられるほどの翻訳つぶりとなつた。

「セキュリティ面も年々強化されていて、今や世界一のハッカーをもつてしてもネクスト・ワールドのセキュリティは破れない。研究内容が漏れることもなければウイルスに感染することもないってことだ」

何故か伊佐君は固まつていた。  
とりあえず僕は説明を続ける。

「対応できる人数も増えたからね。ネクスト・ワールド内に会社や研究所を作ることも多くなつた。ネクスト・ワールド内にあれば、その人の家がどこだらうと毎日出勤できるからね。同じ職場に居ても、その人の住む家は日本とアメリカ、ロシアとオーストラリアみたいにてんでバラバラってことが起こるわけさ。伊佐君もそういう会社に就職すれば、家に『コネクタ』を設置してそこから出社するようになるんじゃないかな？」

気がつくと、伊佐君はわなわなとふるえていた。

顔を紅潮させた伊佐君は、ぎつとこちらを睨んできた。そして、

「ゆ、夢がない！　仮想空間が実現できたならゲームに転用すべき

でしょー!?

睡を飛ばしながらしゃべる伊佐君を見て首をかしげる。はて。

「夢がいっぱいだと思つけど。世界中の人間とリアルタイムでやり取りできるなんて昔と比べると夢のようだよ? しかも翻訳までしてくれる。離れた場所に居てもメッセージを飛ばすこともできるし、ネクスト・ワールド内の移動は歩かなくともコードを入力さえすれば一瞬でできる。そもそも体を実際に動かすわけじゃないから疲れないしね。ああ、もちろん一定は筋肉に刺激を与えて動かしているよ。床ずれなんかもあるし、一日中寝ているようじや筋力も落ちるからね。ログイン中は食事ができないから点滴や流動食で栄養を補充できるようにもなってるし」

「夢がない!」

五十年のジョンネレーションギャップは、よく分からぬままに埋まるとはなかつた。

その後、伊佐君は五十年の空白を埋める」とく勉強し、ネクスト・ワールドの仕組みを転用した『電腦世界パラダイスX』というオンライン仮想現実ゲームを実用化することとなる。

彼の尽力により仮想現実のさらなる医学方面、軍事方面での運用が進むこととなつたのは余談である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9855t/>

電腦世界『ネクスト・ワールド』

2011年6月15日14時58分発行